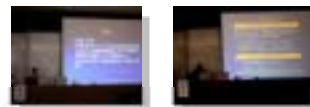


学会に参加して



第52回 中国・四国精神神経学会 第35回 中国・四国精神保健学会 精神科デイケア 作業療法士 今城恵理

平成23年11月18日、19日と第52回中国・四国精神神経学会、第35回中国・四国精神保健学会に参加し、精神保健学会において、「精神科デイケアにおける就労支援のあり方～就労プログラムを通して～」という内容にて発表を行ってきました。

精神保健学会では、作業療法士だけでなく、看護師や精神保健福祉士と様々な職種が発表しており、入院中から地域まで幅広い演題がありました。また、特別講演やシンポジウムでは、最新の精神保健についてや震災から学んだことなど勉強になるものが沢山ありました。

今回の発表では、当院精神科デイケアで行っている就労プログラムについて行いました。昨今、様々な病院で行われている就労プログラムですが、当院の特徴や今後の課題、展望を発表することで、意見を頂くことも出来ました。今回の発表で頂いた意見を今後のプログラムに反映出来るよう、デイケアの中で話し合い、プログラムを実施していけたらと考えています。そして、今回の発表でご協力いただいた方々に感謝申し上げます。



第53回 全日本病院学会に参加して (沖縄)

栄養部長 宮地悦美

1日目は一般演題、2日目はシンポジウムに参加した。

一般演題ではリハビリテーション関係、栄養・給食関係に参加した。リハビリ関連の一般演題では既往歴に脳性麻痺のある人口呼吸器装着患者に、STが長期にわたり介入し、胃瘻を脱却した症例や臨床心理士の参加により、抑うつ状態などの心理的問題に介入することで、食事の摂取量UPにつながり、チーム医療の実績UPとなった症例など、職域の枠を感じさせない演題が多いことに、関心をもった。

栄養・給食関係では嚥下困難者への、胃瘻の適応からソフト食への経口摂取の考察等、一連の栄養管理についての演題、災害時の食事の運用など、時勢に応じた演題が多く、委託会社関連の演題の多いことを知った。

災害関連では、給食産業のシンポジウムにて、緊急災害時の給食対応をテーマに挙げ、今回の大震災時の対応のまとめが報告された。ネットワークの大きさやクックチル(数日前に食事を作る提供の仕方)では給食産業のメリットが生かされた事が報告された。

2日目は病院のあり方委員会企画「未来(2025年)の医療提供体制」に参加した。このシンポジウムは来るべき高齢社会に対応すべき、今後の医療のあり方を検討しようという会で、大きく①機能分担と役割分担を持たせた病院を地域ごとに構築する。②診療情報の公表、医療機関の情報を公開し、継続的質の向上の努力をする。③高齢者の定義を70歳以上としてはどうか。④診療報酬を一定の臨床指標に基づく支払いとしてはどうか。⑤医療保険の統合、などが議論された。なかでも特に診療報酬の一つの考え方として、一定の臨床指標に基づく考え方(成功報酬や血糖などの臨床データに基づき、診療報酬の支払い額を検討する考え方)は斬新的なものであった。しかし、急性期の病院と療養型の病院とはその機能のちがいがからも、今後の検討課題は多いとの見解であった。そのためにも診療情報の公表は必要であり、医療者側と患者側との共有認識も必要であることなどの意見が出された。医療保険の統合も今後の国の財政を考えた場合、分けて考えられないのかもしれない。

その他、ランチョンセミナー「食べて治す、食べて癒す」では今後増え続ける医療体制の中で、栄養管理を駆使した社会体制を構築することが大切。医療の予防、基礎は栄養管理である。「魅力的ある職場環境創り」では人を喜ばせることで、円滑な職場環境が維持できることを楽しく学んだ。

栄養部運営に関し、医療の大きな流れや、先進的な運営方法を学ぶことが出来た今回の研修は、非常に有意義な研修であった。青い空とスカイブルーの海にかこまれて楽しい研修会を終えた。

「第7回 四国摂食・嚥下研究会」に参加して

リハビリテーション部言語聴覚療法室 桑原生子

第7回 四国摂食・嚥下研究会が平成23年11月25日に愛媛大学医学部で開催されました。当院からは、院長先生、田井看護師、豊田看護師、玉木看護師、宮地管理栄養士、ST 桑原が参加しました。また、「長期遷延性意識障害後に嗜好的経口摂取が可能になった症例」という演題で桑原が発表しました。まず、発表の内容について簡単に報告します。重篤な意識障害のため人工呼吸器管理・経鼻経管栄養の状態で約10年前に他院から当院に転院してきたある患者さんは当院転院後に自発呼吸が始まり、人工呼吸器から離脱し、その後痛み刺激などにも反応するようになり、転院8年目には簡単な意思疎通ができ始めました。経口摂取希望を問う質問にうなずいたため、STの関わりも開始し、言語機能や食べる機能に働きかけたところ、コミュニケーションがスムーズに図れるようになり、発症後約20年ぶりに嗜好品や少量の食事摂取も可能になりました。この患者さんの当院での長期経過を報告し、意識障害の改善の要因について神経学的観点からまた乳幼児の食べる機能の発達を参考に考察しました。

他の演題としては、「食べたい思いをどう支えるか」(徳島病院看護師)や「VF検査のクリティカルパスを導入して」(高松医療センターST)など栄養士や看護師 ST、医師の発表がら題ありました。

今回は愛媛県という遠方ではありましたが、皆深夜勤務後にも関わらず、3名の看護師が参加しました。例年よりも多くの参加者がいて、道中にもぎやかで良かったと思います。

私の発表にあたっては考察の仕方に苦慮しましたが、院長先生のご助言やご指導があり、なんとかかまとめることができました。発表にあたり、協力してくださった院長先生をはじめ、看護部や栄養部、リハ部のスタッフに感謝申し上げます。来年度は高知で開催されます。多くの方が参加できることを願います。